

序^{*1}

牛 場 大 蔵^{*2}

日本医学教育学会が編集して世に送る「医学教育白書」は、これが第5回目である。

第1回は1972年2月に「医学教育」3巻1号の特集“日本医学教育の現況”としてまとめた白書的なものであった。その後はいずれも「医学教育」別冊として、第2回は1978年2月、第3回は1982年7月、第4回は1986年7月にそれぞれ刊行された。そして今回は第2回以後4年ごとの計画通りに、1990年に1986年以降のデータが集録されたわけである。

構成は前回のものとほとんど同じで、ただ卒後の問題として専門医・認定制度の次に大学院の新しい章が設けられたのみである。

前回の白書ではようやく医師過剰問題が巷間に噂され、医学教育は量から質への変換が論ぜられた。それと同時に、社会的な要望に応える現象として、医の倫理、医療経済、高齢者医療、あるいはターミナル・ケアなどの諸問題が医学教育のあり方に大きな影響を与える時期となったのは周知である。さらに医療の専門化傾向の普及に呼応して、いわゆるプライマリ・ケア、あるいは地域保健医療の必要性が高く叫ばれてきた時期でもあった。

^{*1} Preface.

キーワード：日本医学教育学会，医学教育白書

^{*2} USHIBA, Daizo 慶応義塾大学名誉教授，日本医学教育学会会長

さてそれに引きつづく今回の白書で扱った時期はどうであったか。

医師過剰の問題は、現実的な対策としてとくに国立大学における入学定員数の削減が相つぎ、まさに量から質への変換の下地を作りつつあるように見える。また、かつて1984年にアメリカ医科大学協会が発表した“21世紀へ向けての医師”という医学の一般職業的教育に関するパネル報告に続いて、1987年9月に文部省が発表したわが国の“医学教育の改善に関する調査研究協力者会議の最終まとめ”に見るように、医学教育の質的改善が強調されてきた。

しかしながら医学教育実施面での現実には、過去4年間目に見えて変化したとはいえない。むしろこの4年間はそれまでに一応固められたと思われる基盤に立って、徐々にではあるが改善の実践が進められようとしている時期ともいえるであろう。

入学者選抜法、卒後臨床研修、専門医・認定医制度、あるいは生涯教育の問題などは、わが国独自の難問を依然として抱え、改善へ向けての早急な追求が望まれるし、医師国家試験改善の研究も基礎的問題として欠かすことができない。

本白書がそれら諸問題解明に向かっての必要な足がかりの多くを提供するものであることを切望する次第である。